

あなたは大丈夫ですか？

税理士が間近で見た「傲慢社長」

高額報酬を手にするようになった経営者は、我欲の肥大に気をつけたい。変化に気づくのは、付き合いが長く、客観的な立場の税理士であることが多い。本記事では、傲慢な経営者が抱える経営リスクを考える。

経営者が傲慢になるとすると、いくらくらの年間報酬を受け取るようになってからが多いのか。

「中堅企業の場合は3000万円台半ば、中小企業なら2000万円。税理士として経営者を20年近く間近で見てきた私はそう考えている」

傲慢になる分岐点は価値観や自由に使える会社の経費によっても左右されるが、マネーコンシェルジュ税理士法人(大阪市)の代表を務める今村仁税理士は大まかな目安を挙げる。

そんな今村税理士が顧問として中堅・中小企業の経営者とやり取りして痛感しているのは「傲慢になるのは特殊なケースではなく、

誰でもなり得る」という点だ。

社長あるいは役員という時点で、既に周囲からの視線には多少なりとも羨望が込められている。それに加えて、会社の業績が伸び、報酬が増えて経営者の羽振りが良くなってくると周囲がおだて始め、行く先々でこれまでは出合うことがなかったワンランク上のものや話を紹介されるようになる。謙虚さに欠ける経営者なら、たちどころに勘違いして傲慢になる。

例えば今村税理士の顧問先だった設備会社のある経営者は、時流にうまく乗って業績を飛躍的に伸ばし、年間1000万円に満たなかった報酬を2000万円台半ばまで増やした。その結果、本業そ

ちのけで楽をして金儲けをするようになったという。

「幸運を呼ぶという触れ込みのネットレスを販売するなど、投資話に夢中になってしまった。周囲に上場を目指す経営者がいれば、出資して上場を急がせることもあったようだ」(今村税理士)。

この経営者は金遣いも派手になり、経費で夜の街に落とす金は10倍以上に増え、事業と無関係の高級腕時計を「経費扱いで買いたい」

本誌連載「高収益体質エクスサイズ」でおなじみの古田士満氏によれば、社長は自身の報酬を、経常利益を基に決めているという

経常利益に連動する傾向に

社長の報酬

経常利益	平均月給(年収換算)
5億～15億円	約400万円(約4800万円)
2億～5億円	約300万円(約3600万円)
1億～2億円	約200万円(約2400万円)

出所:古田士会計が約1800社のクライアント企業に実施したアンケート調査。年収換算は、平均月給を編集部が12で乗じて算出

傲慢になるのも防ぐ

と言いつつ始末だったという。ところが、ある日、従業員が取引先を引き連れて独立し、会社は時代の追い風がやんだこともあって業績不振に。見栄で買ったのか、自社ビルを建ててしまっていたこともあり、その会社は倒産した。

経営に興味がなくなる

金遣いが派手になっても、経営を引き続き一生懸命やっていたら、このような末路は避けられるのかもしれない。ただし、報酬が増えて傲慢になった経営者は得てして経営に対する関心が薄れがちだ。

五島税理士事務所（東京・渋谷）の代表を務める五島洋税理士は、傲慢な経営者には対照的な2つのパターンがあると指摘する。

「もともと傲慢な性格で、その度合いが会社の成長とともに増す場合がある。ただ常に挑戦とばかりに、仕事に対して精神的に取り組むので、まだましと捉えることもできる。一方、大金を持つようになって金遣いが派手になり、仕事に飽きてしまうケースもあり、税理士としては心配になる」（五島税理士）。

午前中に出社しない、社員の面

傲慢経営者にありがちな行動

- 1 約束時刻によく遅れ、謝らない
- 2 昼前に出社し、趣味関連のホームページばかりを見ている
- 3 儲け話にすぐ飛びつく
- 4 社外の相手でも話し方が上から目線
- 5 業績が落ちても自分の報酬を下げない

倒を見ない、経営を幹部任せにする。これらは傲慢な経営者によく見られる危険な兆候だという。

中堅・中小企業の場合、社員は経営者自身の人柄に引き込まれて入社するケースが珍しくない。にもかかわらず、経営者が自社への興味を失い、さらには時間にルーズになったり、尊大な態度を取るようになったりしたら、社員に対する求心力は著しく低下する。

「経営者の傲慢ぶりは、最終的に会社全体の士気を緩めてしまう」（今村税理士）ことを、経営者は戒めとしたい。

